

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【京都市】

1 実践テーマ	【 I 】
2 実施対象者	京都市立大宅中学校 全校生徒 307人 (1年生101人, 2年生97人, 3年生109人)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 () ② 行事名 (全校人権学習) (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	・障がい者スポーツを通して、肢体不自由について理解を深め、 身体障害者への偏見や差別をなくす。 ・2020年東京オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を持たせる。
5 取組内容	<p>事前学習として、パラリンピックの意味や、種目等を知り、障がい者スポーツへの興味を持たせた。また、講師の紹介DVDを作成し、車椅子体験へのイメージを膨らませる取り組みを実施した。</p> <p>また、車椅子体験（全校300人での体験）をスムーズに実施できるよう、生徒に体験の流れを伝え、あらかじめ動きの確認を行った。</p> <p>その他、身近にあるバリアフリーについて考え、自分たちが足の不自由な方にどのようなことができるのか、また社会福祉の観点からどのような取り組みができるのかを考えさせた。</p> <p>車椅子体験（2時間）では、講師として、女子車椅子バスケットボールの日本代表候補の3名（チーム「カクテル」に所属しているキャプテンの北田千尋選手、柳本あまね選手、北間優衣選手）を招き、競技用車椅子の乗車体験を実施した。</p> <p>（競技用車椅子は、障がい者スポーツセンターより、10台をレンタルし、運送会社（洛西運輸）に運搬を依頼し、体験前日に搬入、体験直後に搬出した。）</p> <p>体験内容は、①前進での車椅子リレー（クラスごとに別れてリレー形式で全員乗車）、②後進での車椅子リレー、③試合体験（1年対2年、2年対3年、3年対1年の試合を5分間5人対5人で実施）</p>
	 

	<p>最後に、講師の方から、肢体不自由の方が、どのような困りを抱えているのかを交えて講演いただき、これまでの体験談等を語っていただいた。また、事前学習で考えておいた質疑応答の時間をとった。</p> 
<p>6 主な成果</p>	<p>生きがいをもって活躍する講師の選手の姿を見て、肢体不自由は不便だが、不幸ではないことを身をもって体験することができ、これまでもっていた障がい者に対する偏った見方が変えられた。</p> <p>また、全員が車椅子体験をすることにより、運転することの難しさや、スポーツしている方のレベルの高さに触れ、パラリンピックへの興味や関心が引き上げられた。</p> <p>ヘレンケラーの「障がいは不便だが、不幸ではない」という言葉を引用し、まとめをすることで、この言葉の意味が生徒たちによくわかり、足の不自由な方だけではなく、多くの障がい者の方についても同様の見方ができるようになった。</p> <p>また、障がい者の方との距離が近くなり、今後の生活の中でも、障がい者に対する接し方が変わっていくと思われる。</p>
<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>全校(約300人)人権の取り組みで、300人全員が車椅子の体験をするため、生徒のスムーズな移動が必要であった。</p> <p>そのため、事前学習として、生徒自身が2時間の流れを把握して移動できるようPP等を使用して準備した。</p> <p>講師の紹介においても、事前学習でよくわかるように、講師の名前を書かせたり、短い動画を作成するなどし、スムーズに実施できるようにした。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>講師としてスポーツ選手を招くときは、スポーツ選手の技術のすごさに目がいってしまい、「障がい者の抱えている困りに気付いたり、障がい者への理解を深める」という目的が達成できない危険性があるため、体験では、「生きがいをもって輝いている」姿を見せることが重要である。</p> <p>300人規模の体験では、生徒の動きがスムーズに行くよう事前の指導が必要であるとともに、事前に講師との打ち合わせを入念にしておいた方がよい。</p> <p>また、見ている(待っている)生徒の指導が必要な場合には、パトロールなど等の勘案が必要。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>次年度は視覚障害に対する理解を深めることを目標としている。</p>